

論文

# 韓国のカフェ文化について： 1860年代から1950年代までのコーヒーとカフェ文化

A Study on Korean Cafe Culture : Coffee and Cafe Culture from the 1860s to the 1950s

金 惠媛<sup>1)</sup>

Kim, Hyeweon

## 要旨

現代韓国社会を理解するキーワードの一つとしてカフェ文化がある。カフェは、多くの韓国人にとって、日常生活を営むうえで重要な空間となっている。本稿では、カフェ文化を理解する第一ステップとして、コーヒーが導入された1860年代から「タバン」（韓国式カフェ）が定着する1950年代までの期間に焦点を当てた。分析の結果、利用者の視点からみると、この時期のコーヒーとカフェは特定の人々によって共有される文化であったことが明らかになった。また、コーヒーとカフェが普及する過程において、米軍PXからのインスタントコーヒー、並びに韓国戦争が大きな影響を及ぼしていることがわかった。

## Abstract

This study examines cafe culture as one of the keywords for understanding contemporary Korean society. Cafes have become an important space for many Koreans in their daily lives. As a first step in understanding its characteristics, this paper focuses on the period from the 1860s, when coffee was introduced, to the 1950s, when 'Dabang'(Korean-style cafe) became established. The analysis revealed that from the perspective of users, it was found that coffee and dabangs during this period were a culture shared by certain groups of people. Also, it has been confirmed that instant coffee from the U.S. military PXs, and the Korean War had a significant impact on the popularization of coffee and dabangs.

## Keywords

Korean cafe Dabang the Korean War

## 1. みんなに開かれた場へ変身するカフェ

近年の韓国カフェの変貌ぶりには目を見張るところがある。家の周りにはたいがいカフェがあり、ちょっと歩けば別のカフェに遭遇する。また車に乗ってカフェツアーをしたという話もよく耳にする。ミュージアムカフェ、カンヌン（江陵市）のカフェ通り、AIバリスタのカフェなど、もはやカフェはコーヒーを楽しむ場所ではなく、体験型複合文化スペースである<sup>2)</sup>。こんな場所にこんなコンセプトのカフェがと驚きの連続である。筆者が通っていたカフェの例だと、広々とした快適な室内には無料Wi-Fiと充電用の電気コンセントとデスクテーブルが完備されている。座席も様々なタイプがあるが、オンドル席もある。飲み物だけではなくおいしいパンとピザ、そして夏はかき氷と、豊富なフードメニューが提供される。そのうえ、早朝から深夜まで営業しているところが多いから、長時間の勉強や仕事にも支障がない。

また、子どもや中高年層（特に男性）の利用者が増えていることも驚きである。ママ友が話に盛り上がっている隣で子どもたちが宿題をしている。タブレットで読書や動画に夢中の壮年層もよく見かける。高齢の

1) 山口県立大学国際文化学部教員（韓国社会論）。

2) 한예진 (2025.12.16)。



<写真> 都市部近郊の大型カフェ店内の例(2022年、筆者撮影)

男性グループが「お酒を片手に」ではなくコーヒーやティーを飲んでいる<sup>3)</sup>。一定の料金を支払えば誰もが平等に利用できる空間である。オフィスや塾のような場所、あるいは自宅のリビングのような使い方もできる空間、老若男女のすべての人に開かれた場である。カフェは学校や職場、そして自宅に並ぶ日常生活空間である、といっても過言ではない。

韓国のカフェがこのような形に変化したのはスターバックスがオープンした1999年以降、国内外の大型カフェフランチャイズチェーン店が大挙進出して以来である。インターネット環境の整備、スマートフォンの普及によっていつでもどこでも活動ができるユビキタス(ubiquitous)社会が実現したことも背景として大きい。また、ある建築家の知見によると、一人世帯の増加によって一人の実質占有面積が縮小し、その結果、より広い、快適な場所を求めた産物だとする<sup>4)</sup>。いずれにしても、老若男女を問わず、利用目的や内容に関係なく誰もが利用しやすい環境が整っている。人々が気兼ねなく長時間利用できる場所である。

韓国のカフェにおいて、このような利用者及び利用形態の多様化が進む背景、さらには今後の動向が気になる。また、一人暮らしや高齢者の増加、高齢期の長期化とともに社会的孤立の予防、居場所の確保が喫緊の課題とされているが、身近な居場所としてのカフェの役割に期待が高い。カフェのパラダイムシフトが続くなか、身近なパブリックプレイスとしてカフェにどのようなメリットと課題があるのだろうか。

そこで本稿では、韓国カフェの変遷と今後の動向を知る試みとして、まず、韓国に初めてコーヒーが伝来してから韓国戦争の頃までのコーヒーと「タバコ」(茶房)の利用状況についてみていく。韓国においては圧縮した近代化が進んだ1960年頃よりコーヒーやタバコの需要が急増し、1970年にはタバコの全盛期を迎える。その後、タバコが衰退しコーヒー専門店やカフェの時代へと変わっていく。本稿で取り上げる1860年代(コーヒーの導入期)から1950年代(タバコの定着期)までは、韓国にコーヒー嗜好やカフェ文化が形成される時期として位置づけられる。

## 2. 「ごはんよりコーヒー」(밥보다 커피!)

外国人が驚いた「韓国あるある」に「식사했어요?」(ご飯食べましたか。)[「식사 한번 해요.」(今度ご飯食べましょう。)]がある。聞かれて困ったが、これらの質問のポイントが必ずしも食事にあるのではなく「こんにちは。」「また今度お会いしましょう。」レベルのあいさつ言葉であることが分かった、という内容である。

その韓国において、近年、ごはんにも勝る存在となったのがコーヒーである。「밥보다 커피」(ごはんよ

3) 17世紀のヨーロッパではコーヒーがもたらす覚醒効果からもコーヒーハウスが高評価を得ていたが、韓国でも近年、飲酒運転を避けるためにバーではなくカフェで集まる文化が定着しつつある。

4) 유현준 (ユ・ヒョンジュン) 2020.12.26 「프리미엄 특강쇼 [어쩌다 어른] EP.95 건축가 #10 | 초등학생은 편의점, 대학생은 카페, 연인들은 모텔을 찾는 이유! 대실 시스템의 홀름함 # | #어쩌다어른 #사피엔스」 <https://www.youtube.com/watch?v=gKt0We2Q5yQ> (参照 2026-01-04)

りコーヒー)<sup>5)</sup>、「커피수혈」(コーヒー輸血)という極端な表現もあるほどである。「커피 어때요?」(コーヒー飲みませんか。)という誘い言葉も前記のご飯を使った挨拶同様よく用いられる。ブレイクタイムの言い出しや久しぶりに会った時、そして込み入った話がある時に便利な表現である。「習慣的」「やる気スイッチ」「人とのコミュニケーション」、「受験勉強時の集中力を高めるため」、さらには「健康のため」にと飲む理由はさまざまであるが<sup>6)</sup>、コーヒーが韓国人の最も好む飲み物であることに異論はないだろう<sup>7)</sup>。その圧倒的な消費量と店舗の多さから「コーヒー大国」「カフェ天国」ともいわれている韓国であるが<sup>8)</sup>、いつ頃から「밥보다 커피」(ごはんよりコーヒー)の社会へ、カフェが日常生活圏に入ってきたのだろうか。

### 3. コーヒーの伝来

利用者の観点からみると、韓国でコーヒーやコーヒーショップ<sup>9)</sup>が大衆化したのは1970年代頃からと、比較的最近のことである。コーヒーショップが老若男女の誰もが利用しやすい空間を標榜するようになったのはさらに歴史が浅い。まず、1860年代後半にコーヒーが伝来し、普及するまでの時期についてみていく<sup>10)</sup>。記録上、初めてコーヒーが伝来するのは朝鮮王朝末期の1860年にさかのぼる。当時朝鮮で活動していたフランス人の神父が香港の関係者に送った書簡にコーヒー豆を約20kg依頼する内容がある。1863年11月の書簡でもコーヒー豆50kgを頼んでいる。記録としては、主として、朝鮮に滞在していた外国人がコーヒーを楽しんでいた時期とみられる。ただ、同神父が依頼した量が一人で飲む量としては多いことから、同神父と一緒に活動していた朝鮮の信者や関係者と一緒に飲んだのではと推定される<sup>11)</sup>。朝鮮第25代国王哲宗時代(1850～1864年)から信者数の増加が得られたが、当時のカトリック信者数は1万人以上に達していたとされる<sup>12)</sup>。また、朝鮮第26代国王・大韓帝国第一代皇帝高宗の即位(1863年)を記念したミサ(礼拝)が宮殿(雲岷宮)で行われている<sup>13)</sup>。これらのことから、限定的な範囲ではあるが、カトリックの布教と朝鮮の人びとの交流においてコーヒーが登場する場面があったとみられる。

5) 2021年国民栄養統計によると、韓国人がたくさん食べるものの1位が「白菜キムチ」、2位が「コーヒー」、3位が「ごはん」だという(国立民俗博物館『民俗消息』vol.303, 3頁, 2024年9月)。

6) 10代から60代の500名を対象にコーヒーを飲む理由を聞いたところ、「朝のやる気スイッチに」27%、「習慣」26%、「味」23%、「コミュニケーションに」12%、「受験勉強のために」10%、「趣味」1%の内訳であった(国立民俗博物館『民俗消息』vol.303, 4頁, 2024年9月)。

7) 韓国の新世相を表す興味深い議論がある。法事の際に故人の嗜好品、特にコーヒーをお供えすることの是非についてである。儒教の儀礼と個人の考えとの間にズレがあって、なかなか両方が納得する結論には達しにくい。儒教文化とコーヒー文化の衝突ともとらえられる議論であり、韓国にコーヒー好きが多いことがうかがえる(『儒教文化新聞』2025年10月4日「의례 [향주리 제례문답] 1. 차례상·제사상에 커피나 치킨 등 기호식품을 올려도 될까?」)。

8) 韓国関税庁輸出入貿易統計によると2023年現在コーヒー豆輸入量は11億1106万ドルで増加トレンドを維持している。一人当たりの消費量の面でも、韓国は年間416カップと、アジア太平洋地域の首位を占めている(정 서영, 2025)。

9) コーヒーが提供される場所、店については、茶房、コーヒーショップ、コーヒーハウス、コーヒー専門店、そしてカフェと、時代や店の特色によって多様な名前と呼ばれてきた。ここでは、総称としてコーヒーショップを用いる。

10) コーヒーとカフェの変遷については、主に、パク・ヨンスン「我が国コーヒーの変遷史」(『民俗消息』Vol.312, 2017年11月)を参照した。

11) イ・キルサン(2025年, 25-32頁)

12) 「韓国天主教会史」(「明洞大聖堂」公式HP) [http://www.mdsd.or.kr/bbs/content.php?co\\_id=6010](http://www.mdsd.or.kr/bbs/content.php?co_id=6010)

13) 「雲岷宮の人物」(「雲岷宮」公式HP) <https://www.unhyeongung.or.kr/sub/introduce/character.php?ckattempt=1>

<表1 コーヒーの伝来とコーヒーショップの誕生期の主な状況>

	コーヒー
1860年	フランス人神父のコーヒー豆依頼書簡
1883年	仁川港輸出入一覧表の記録（同年、仁川港開港）
1884年	・宮廷の外国人客に対するコーヒー接待 ・釜山における朝鮮人のコーヒー飲用記録
1896年	高宗国王のコーヒー飲用
1897年	ドイツ人のコーヒー豆販売店広告（『独立新聞』3月20日付）
1899年	朝鮮人のコーヒー豆販売店の広告（『独立新聞』8月31日付、同年、京仁線開通）
1902年	ソントク（Sontag）ホテル1階レストランで初めてのコーヒー販売
1927年	朝鮮人による初タバン「カカデュー」（カカデュー）オープン <sup>14)</sup>

資料：パク・ヨンスン（2017）を参考に筆者作成。

仁川港開港、京仁線開通以降コーヒーをめぐるやりとりが増えてくる、すなわち物流や人的交流が港や駅を中心に行われていた様子が表からうかがえる。宮廷訪問や高級官吏との交流の際にコーヒーのおもてなしを受けた外国人の宣教師や学者の日記、輸入品リストなどの記録が残っている。コーヒー豆を販売する初めての新聞広告（『独立新聞』、1897年3月20日、1899年8月31日）からは、コーヒーの輸入量の増大、輸入方法の安定化がうかがえる。利用者の観点からみると、コーヒーを飲む場所が特別な空間から街へと広がり、豆を買う顧客層が形成されつつあることがわかる。もちろん顧客の多くは外国人であった。ただ、朝鮮人の販売業者の広告や前述のカトリック教会での交流状況を踏まえると、コーヒー飲用の習慣やコーヒー文化が、一部朝鮮人にも普及していることは十分推測できる。近年、釜山で『海隠日録』という資料の発掘により、1884年にすでに민건호（ミン・コンホ）という朝鮮人税関職員がコーヒーをふるまわれたということが明らかになっている<sup>15)</sup>。新しい情報や文化が港や駅、外国人との交流の場を中心に流通し、そのなかでコーヒーの導入も進んでいたことがわかる。

#### 4. タバンの誕生

1900年代に入ると、コーヒーを売る店がソウル市内に登場するようになる。レストランの中のコーヒーショップや日本式カフェ、そして朝鮮人によるタバン（茶房、다방）などが登場する。まず、ソントク（Sontag）ホテルであるが、記録が確認できる朝鮮初のコーヒーショップである。ロシア公使の親戚であり宮内部において外国人接待業務を担当して高宗の信認を得たソントクが運営したホテルのコーヒーショップであり<sup>16)</sup>、主に政治・外交の舞台として使われた。いうまでもなく、利用者も外交官をはじめとする高級官吏、知識人が多かった。1920年代からは日本人居住地を中心に日本のカフェも増加するようになり、宮殿からソウル市内へとコーヒー文化が広がっていった。

そして、朝鮮人による初めてのタバン「カカデュー」（カカデュー）が、映画監督イ・キョンソン（이경손）によって誕生する（パク・ヨンスン、2024）。ヨーロッパの「コーヒーハウス」をモデルにした「カカデュー」には主に文学者、知識人が集まり、文学に関わるイベントや創作、文学者と一般人の交流、さらには、啓蒙活動が展開された。商業中心地の鐘路地区に留学帰りの俳優キム・インギユの「メキシコ」（1929年）、留学帰りの美術家李順石の「낙랑파라」（樂浪パーラー）（1932年）<sup>17)</sup>、詩人で小説家の李箱（이산）

14) 「カカデュー」は跡地も記録もあいまいなところから開店時期については1927年または28年の説がある（パク・ヒョンス、2024）。なおこの時期のタバンは日本の純喫茶に近いもので、主に飲料を販売していた。

15) 이현정（イ・ヒョンジョン）・조영미（チョ・ヨンミ）（2021.09.23）。

16) Daily Art（2024.12.19）。

17) キム・キチオル（2022）。

のタバコ「제비」(チェビ、燕)(1933年)をはじめ、芸術家や俳優によるタバコの開業が続く(パク・ヒョンス、2024)。この時期のタバコは、芸術同好会のたまり場のように作品創作に関する討論や国の将来に対する議論で盛り上がり、また新しい文化を体験する場として活用されていた。タバコを題材にした詩や小説には<sup>18)</sup>、デパートの「コーヒーを売る場所」と異なる空間としてタバコの位置づけが述べられている。今林は、フランス革命時のカフェの位置づけを考察するなかで、カフェの特徴として、コーヒーを飲むだけの場ではなく「『それ以外の何か』を求めて通い続けること」を強調する(今林、2014)。植民地社会を生きる当時の若者、芸術家も心身の疲労感が癒される場所、同じ思いを持った仲間とつながる居場所として、タバコに「通う」ようになっていたのではないだろうか。前述の李箱が経営難から「제비」の廃業に追いやられてからも「쓰루」(ツル、鶴)、「무기」(ムギ、麦)とタバコ開業を継続して試みた理由もまた、タバコという場所とそこに集まった仲間が調和して「それ以外の何か」を作り出す魅力からであろう。

ここまで、1860年代から1900年代前半まで、朝鮮に初めてコーヒー及びコーヒーショップ、そしてタバコが導入され、徐々に普及する状況についてみた。利用者の観点からみると、時代状況から想像できるように、この時代のコーヒー、コーヒーショップ、タバコは特定の階層にとって有意味な場所であった。ソントクホテルのコーヒーショップ、日本人のカフェは言うまでもないが、タバコも一般の人に広く開かれた空間とはいえない。コーヒーも特権層や知識人など一部の人の象徴的な飲み物であった。朝鮮人が作ったタバコの場合も、特殊な時代状況を生きる芸術家が主な利用者となる空間であった<sup>19)</sup>。

## 5. インスタントコーヒーとタバコの普及

コーヒーをめぐる大きな変化は、米軍による信託統治が始まった1945年以降となる。米軍の進駐にともなうPX(Post Exchange)、つまり、米軍関係者の生活物資を取り扱う店舗から闇市に流れたインスタントコーヒーの普及である。米軍進駐の一か月後の1945年10月から、米軍駐屯地を中心に全国に大小規模の180か所のPXが設置された(チョン・ボンガン、2025)。PXからの物資の流通は韓国戦争停戦の1953年頃まで続いた。米軍の撤収(1949年6月)とともに縮小していったPXは韓国戦争<sup>20)</sup>の勃発(1950年6月25日)とともに再び拡大するようになった(チョン・ボンガン、2025)<sup>21)</sup>。

本来PXで買い物ができるのは米軍と一部の韓国人関係者のみである。植民地から独立、間もない米軍の進駐といった混沌する時代状況のなか、PXからは大量の物資が闇市場に流れた。当時の韓国では手に入らない珍しい物や質が高いものが多かったことはいうまでもない。インスタントコーヒーの人気はアメリカへの憧れを投影するものでもあった。それまでコーヒーは、自国での生産や貿易による輸入ができない状況であり、誰もが楽しめるような安価な飲み物ではなかった。しかし、インスタントコーヒーは相対的に安価でお湯を入れるだけで手軽に飲めるということで闇物資のなかでも人気が高かったという(Inae Cho, 2003)<sup>22)</sup>。韓国人が食後にのんでいるおこげスープのような馴染みやすい味の特徴もコーヒーの普及に拍車をかけた。この時期のインスタントコーヒーの恩恵を受けたのは米軍関係者や闇市利用者が中心となるが、韓国人の日常生活にコーヒーが広がるきっかけとなった<sup>23)</sup>。

大勢の避難民が押し寄せ、長期間の避難生活が続いた釜山地域では、この時期にタバコが急増する。戦前

18) イ・ヨンアクの詩「タバコ」、パク・テウォンの小説『小説家仇甫氏の一日』など(パク・ヒョンス、2024)。

19) 「コーヒーハウス」は階級を問わずロンドン市民なら誰でも入場できる、開かれた場として画期的な空間であったがその利用者は男性に限定されていた(小林、2000)。この時期の朝鮮のタバコも一般化には至っていない。

20) 本稿では、「朝鮮戦争」ではなく韓国の「韓国戦争」という表現を用いる。韓国では戦争勃発日を用いた「6.25戦争」という名称が使われてきたが、現在は国際的な名称「Korean War」にあわせて「韓国戦争」を用いる。

21) PXは、停戦協定(1953年7月)とともに釜山基地内に移動するまで、街の中にあった(チョン・ボンガン、2025.06.07)。

22) インスタントコーヒーは、アメリカで特許出願後(1903年)、第二次世界大戦時に米軍に納品され、以降、戦線に沿って世界に広がった(テ・ウォンジュン、2024)。韓国の場合、1945年以降の長期間にわたる駐屯によって、一般の韓国人への影響が大きかったと考えられる。

23) 1948-49年の新聞記事からは、ソウル市内にタバコが流行、増加していること、貧しい生活を送る人が圧倒的に多いなか贅沢過ぎるという非難、政治批判の話題が多いなど、当時の一部の層、都市部においてタバコ利用が定着していることがうかがえる(イ・キルサン、2025)。

からコーヒーやタバコ文化を楽しんできた人にとって、いつ終わるか見通しの立たない戦争の不安を紛らわせる貴重な飲み物であり、戦前からの仲間と会える空間だったようだ。なかでも「밀다원」(ミルダウォン)<sup>24)</sup>はソウルからの避難芸術家が集まる有名な場所であったが<sup>25)</sup>、仲間と再会して音楽を楽しみながらつかの間の休息をとっていたという(임시수도기념관, 58頁)。戦争の混乱のなかで政府機能がほとんど麻痺しているなか、戦況を知るにも仕事のあせを受け取るにも、また芸術的感性を維持しながら創作に打ち込むにも、この時期のタバコはなくてはならない空間であった。「コーヒーを売る場所ではなく座席を売る場所」<sup>26)</sup>として機能していたのである。

1930年代以降タバコが増加してきてはいるが、コーヒーの流入から1950年代に至るまでのタバコは一部の人のための空間だったといえる。政治外交の舞台として、芸術家グループの作業場、居場所として位置づけられた。また、コーヒーやタバコという新文化を体験する場でもあった。特定の興味関心を持つグループの人にとっての居場所とは、おのずと他のグループを排除する結果となる。コーヒーもタバコも、都市部を中心に広がった新しく高級な輸入文化であった。そのため、手の届かない、あるいは利用欲求そのものが発現しにくい対象でもあったといえる。年齢、性別、職業、そして入場目的の制限のみならず、関連する情報や身近なところに経験者がいるか否かで利用可能性が変わってくる。したがって、この時代までのコーヒーやタバコは多くの人にとってはなじみの薄い、非日常的な場であったといえる。「みんな」ではなく「誰か」にのみ開かれた場であった。

## 6. タバコ全盛期への展望

以上、現代韓国のカフェ文化を理解するために、韓国にコーヒーが導入され、コーヒーとタバコ文化が定着するまでの状況についてみてきた。コーヒーが、そしてそれを提供するタバコが誰にとって、どのような空間として位置づけられてきたか、利用者の観点から捉えようとした。韓国人とカフェ、みんなに開かれた場、日常的に通う場としてのカフェという観点から現代韓国のカフェ文化の特徴と動向を理解する基礎資料として有意義である。

コーヒーとタバコは、1860年頃に導入されてから1950年頃まで、およそ100年をかけて多くの人に愛される飲料、空間として成長するようになった。一方、米軍が持ち込んだインスタントコーヒーは、流通量や対象の拡大、そして味や入れ方の面で飲用しやすい点もあって人気があった。このインスタントコーヒーの普及が1960-70年代の「ミックスコーヒー」<sup>27)</sup>及びタバコ全盛期を迎え、現代の大型カフェチェーン店人気へとシフトしていく。コーヒーとタバコが一部の利用者を選択されていた状況からどのように変化していったのか、今後継続して検討する必要がある。特に、年齢、性別、職業、経済水準など、コーヒーやカフェを利用するにあたってハードルとなっていたこれらの要件がどのような状況において取り除かれたのだろうか。「誰か」にだけ開かれている「半開きの空間」から「みんなに開かれた場」への移行過程、その際のインスタントコーヒーの役割について今後さらに考察していきたい。

### <引用・参考資料：日本語>

今林直樹「革命はカフェから始まる——フランス革命とカフェ——」宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所『人文社会科学論叢』No. 23、2014年、1-10

小林章夫『コーヒー・ハウス』講談社、2000年

24) 当時の「밀다원」やそこに集まった芸術家たちの様子については、윤인로 (ユン・インロ) 「밀다원 - 부산역사문화대전 : 해운대구」『釜山歴史文化大全：海雲臺区』がわかりやすい。https://www.grandculture.net/busan/haeundaegu/toc/GC04205631 (参照 2026-01-07)

25) 駐仏韓国文化院が開催した韓国文化祭「2023韓国文化祭—테이스트 코리아! (Taste Korea!) 부산特集行事」では避難時のタバコ「ミルダウォン」を再現したポップアップカフェ「プサンタバコ」を運営した。

26) 『国際新報』(1953.05.27) (臨時首都記念館、59頁より再引用)。

27) 韓国のコーヒーメーカー東西食品は1976年12月に「世界初コーヒーミックスの開発及び発売」(https://www.dongsuh.co.kr/company/history) 実現し、現在なお「コーヒーミックス」市場をけん引している。

<引用・参考資料：韓国語・英語>

- 김 기철(キム・キチョル) 「[모던 경성]1930년대 예술가들의 아지트, '낙랑파라' [뉴스 라이브러리속의 모던 경성]1932년 6월 이순석 개업, 박태원 구분웅 이태준 등 모더니스트들의 '핫플」『朝鮮日報』(2022-11-13) [https://www.chosun.com/culture-life/culture\\_general/2022/11/12/QTISBIBB7ZC4THNUAH3RI6Y3NQ/?utm\\_source=naver&utm\\_medium=referral&utm\\_campaign=naver-news](https://www.chosun.com/culture-life/culture_general/2022/11/12/QTISBIBB7ZC4THNUAH3RI6Y3NQ/?utm_source=naver&utm_medium=referral&utm_campaign=naver-news) (参照2026-01-04)
- Daily Art 「[브랜드의 문화사 ⑫] 손탁호텔, 조선호텔, 반도호텔」(2024.12.19) <https://www.d-art.co.kr/news/articleView.html?idxno=2161> (参照2026-01-07)
- 정 서영(チョン・ソヨン) 「1인당 커피 年 416컵 소비… 카페가 치킨집·편의점보다 많아」『東亜日報』(2025-03-02) <https://www.donga.com/news/article/all/20250228/131126969/1> (参照2026-01-07)
- 전 봉관(チョン・ボン관) 「커피·통조림·양담배·골프채… '거리의 PX'에 모여든 욕망들」(コーヒー・缶詰・洋タバコ・ゴルフクラブ…「街のPX」に集まった欲望)『朝鮮日報』(2025.06.09) <https://www.chosun.com/national/weekend/2025/06/07/JATEVW5GIJD6PFY3236LVQEKPE/> (参照2026-01-04)
- 문화체육관광부한국문화원 「주프랑스 한국문화원, 팝업 카페 '부산 다방' 개장 "커피 한잔 하실래요?"」(2023.08.10) <https://www.korean-culture.org/kocc/view.do?searchType=menu0023&seq=1045795&idx=27169&page=1&pageSize=10&ctrCode=CTR0002>, (参照2026-01-04)
- 박 영순(パク・ヨンスン) 「우리나라 커피의 변천사」『民俗消息』(Vol.312, 2017年11月) <https://webzine.nfm.go.kr/2021/06/02/%EC%9A%B0%EB%A6%AC%EB%82%98%EB%9D%BC-%EC%BB%A4%ED%94%BC%EC%9D%98-%EB%B3%80%EC%B2%9C%EC%82%AC/> (参照2026-01-04)
- 박 현수(パク・ヒョン스) 「근대 문화의 기록장 '종로 모던' <끝> : 종로의 다방 '제비' 사장은 '천재시인' 이상…메뉴는 딱 2개뿐이었다」『中央日報』(2024.06.29) <https://www.joongang.co.kr/article/25260015> (参照2026-01-04)
- 배 민욱(ベ・ミンウク) 「[6.25 60주년-⑤]전쟁 후 달라진 서울…유행 등장·커피 대중화」뉴시스(2016.06.24) <https://n.news.naver.com/mnews/article/003/0003306754?sid=102> (参照2026-01-07)
- 배 재성(ベ・ジェソン) 「우리나라 빛낸 발명품 1위 '훈민정음」『中央日報』(2017.05.20) <https://www.joongang.co.kr/article/21590315> (参照2026-01-04) .
- Inae Cho, "Korea's Coffee History Traces a Nation's Love For the Dark Brew," Korea Joongang Daily (5 Jan. 2003.) <https://koreajoongangdaily.joins.com/2003/01/05/features/Koreas-Coffee-History-Traces-a-Nations-Love-For-the-Dark-Brew/1884233.html> (参照2026-01-04)
- 이 길상(イ・キルサン) 『커피 한 잔에 담긴 문화사, 낱다점에서 카페까지 — 이길상 교수가 내려주는 커피 이야기』, 상굿, 2025年
- 이 현정(イ・ヒョンジョン)·조 영미(チョ・ヨン미) 「부산은 커피도시다」『최초』보다 8년 앞선 '갑비차 마신 기록' 찾았다」『釜山一報』(2021.09.23) <https://www.busan.com/view/busan/view.php?code=2021091618194262610> (参照2026-01-07)
- 임시수도기념관 『임시수도기념관학술연구총서 1 BUSAN in 1950's』, 2013年 [file:///C:/Users/owner/Documents/Downloads/\[%ED%95%99%EC%88%A0%EC%B4%9D%EC%84%9C\]%202012%20%EB%B6%80%EC%82%B01950's\\_%EC%B5%9C%EC%A0%81%ED%99%94.pdf](file:///C:/Users/owner/Documents/Downloads/[%ED%95%99%EC%88%A0%EC%B4%9D%EC%84%9C]%202012%20%EB%B6%80%EC%82%B01950's_%EC%B5%9C%EC%A0%81%ED%99%94.pdf) (参照2026-01-04)
- 태 원준(テ・ウォンジョン) 「커피믹스(コーヒーミックス)」『國民日報』(2024.03.08) <https://www.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=1709796787> (参照2026-01-04)
- 한 예진(ハン・イエ진) 「서울 카페 혁명 2025: AI 바리스타부터 복합문화공간까지 커피문화를 재정의하다」(2025.12.16) <https://visit.seoul.kr/ko/articles/seoul-cafe-revolution-2025-ai-cultural-spaces> (参照2026-01-07)
- 홍정우 「의례 [향주리 제례문답] 1. 차례상·제사상에 커피나 치킨 등 기호식품을 올려도 될까?」『儒教文化新聞』(2025.10.04) <https://www.culturenews.com/460> (参照2026-01-04)